令和２年度

学校評価報告書

帝塚山中学校

学校法人帝塚山学園

令和２年度学校評価について

帝塚山中学校は、令和２年度の教育活動及びその他の学校運営の状況について、学校評価を実施しました。

学校評価は、本校生徒とその保護者、卒業生を対象とした各アンケート結果、保護者等との懇談会で寄せられた御意見等を活用のうえ自ら評価を行い、さらにその結果について学校関係者による評価を行いました。

このたびの結果を踏まえ、更なる教育水準の向上を目指して、教育活動及び学校運営の改善工夫に組織をあげて継続的に取り組んでいく所存です。

帝塚山中学校
校長　池辺　政人

令和２年度　学校評価

１．　総括

学校名	帝塚山中学校
建学の精神	「社会に有為な人材を育成する」
本校の重点目標 （教育目標）	「人間力の育成と個々の進路を実現する教育の推進」 “個性・特性を伸ばし「知の力」「情の力」「意志の力」「躯幹の力」をバランスよく鍛え、高い知性と豊かな情操を備えた生徒を育成する”
前年度の成果と課題	[成果] 個性・特性を伸ばす教育を推進するため、教科会を中心としたプロジェクトチームによる検討を重ね、計画的にシラバス、セミナー、講習の充実を図ってきた。その結果、生徒の学習意欲は高まり、自分から進んで学ぶ姿勢ができてきた。ICTを活用した帝塚山教育の一層の充実を図るため、平成27年度にICT教育の推進母体として中高ICT委員会を立ち上げ検討を進め、平成28～30年度の3ヵ年でICT機器等を計画的に整備しプロジェクターを全教室、演習室、理科専科教室に設置するほか、教員タブレット（Surface、Arrows）の導入、無線LAN環境の全館整備と計画的にICT環境の整備を進めた結果、ICT機器を活用した授業は着実に増加した。令和2年度は新型コロナウイルス感染症感染拡大を受け、緊急事態宣言が発令され、3月から5月の3ヶ月間学校は臨時休校となった。休校中の学習支援として、ICT委員会が中心となり、デジタルを使ってのオンライン授業やオンデマンド授業や課題を配信した。その際、生徒からわかりやすく学べたと好評であった。また、様々なプログラムを実施している特色教育については、コロナ禍で実施できない中、オンラインで繋がり交流を深めることができた。令和2年度は特別の教科「道徳」を担任が実践し、教育内容を決めカリキュラムを固めた。 [課題] 来年度、入学生から3年生までデジタルデバイスを使っての学びをスタートさせる。先の見通せない時代だからこそ、自分で学び、考え、行動する教育がますます必要である。また、新型コロナウイルス感染症対策をしっかりととることで実施できる行事を組み立て、生徒の学習を止めない実践を行うことを第一に考える。コロナ禍をマイナスに捉えるのではなく、生徒自身にもできることを考えさせ、今できること、しなければならないことを自分から進んで実行する力をつけるチャンスと考えたい。

本年度の重点目標	具体的目標	総合評価
1. 個性を伸ばす教育の実践	①　建学の精神に基づく教育目標の共有化 ②　教科指導の充実強化 ③　特別活動･道徳教育の充実強化 ④　進路指導の充実強化	A 一人一人の生徒を大切にする4つの力（「知の力」「情の力」「意志の力」「躯幹の力」）を培う教育を推進した。 コロナ禍で、当初はクラブや行事を中止や延期とすることが多かったが、徐々に感染症対策をしっかりとることで、できることから行った。クラブ活動では、当たり前は当たり前ではない、今できることに感謝する気持ちが生まれた。学び、学校行事では、できた時の達成感、お互いに協力することから得られた協調性、ただ中止するのではなく、出来ることを考え次に繋ごうとする伝統を受け継ぐ姿勢などを学んだ。これらは、今後ますます求められる協調性、探究心を育てるために重要である。キャリア教育、グローバル教育を通して、知識の詰め込みに終わらず、将来の進路に目を向け主体的に学ぶ姿勢ができつつある。 帝塚山小学校からの内部進学推薦制度に関しては、改善されてきた。外部からの入試においては、コロナ禍で遠方の受験生が敬遠したところもあり、昨年より77名減となったが、逆に質とレベルの高い入試を行うことができた。また、併願の戻りが多く令和3年度入学者は332名と定員を確保し、クラス編成は9クラスとなった。当初計画より入学生が多い結果になった。
2. 入学志願者･入学者の安定的確保	①　各学校との連携強化 ②　募集活動･広報活動の強化	
3. 教育の意識改革･行動改革の実施	①　組織運営の充実強化 ②　学校リスクの対策強化 ③　財政健全化策の強化 ④　学校評価の実質化 ⑤　教員評価の実施推進	

２.-①　自己評価（教育活動に関するもの）

評価項目		具体的目標・方策及び評価指標 ※（　）内は評価指標	自己評価結果		評価結果の分析 （評価の観点、理由）	今後の課題・改善方策
教育目標 教育計画	教育目標の周知徹底	教職員への周知徹底はもとより、学校教育目標を保護者会や育友会総会等で確実に伝え理解いただく。（複数回実施）	A	A	教育目標の他、学校運営・行事計画等をまとめた冊子を、年度当初に全教員に配付し、周知徹底を図った。また、保護者にはコロナ禍の中、工夫をして動画配信、文書などで保護者会、育友会において学校教育目標を説明し、理解いただいた。	今後も3密対策を取り、学年を分散して保護者会、育友会総会・委員会を開催し、それらを通じて教育目標を伝達していく。
	教育計画の立案・実行	学校運営・学年運営・教科運営計画を作成して、実行する。	A		学校運営・学年運営・教科運営の各計画を冊子にまとめ、年度当初に全教員に配付し、周知徹底を図るとともに、共通理解のもと実行した。	新しい指導要領について整理と検討を重ねる。
	教育課程の工夫改善	令和２年大学入試制度改革をふまえた教育課程の工夫と改善を検討する。	A		教育課程編成委員会が中心となり、新学習指導要領を見据えた教育課程を検討した。	新学習指導要領にしたがい教育課程の整理と改善方策の検討すすめる。
研究・研修	研修計画の立案・実行	研究テーマに沿った研修を計画的に実施する。（複数回実施）	A	A	校務分掌に沿い、「進路」、「入試」、「教育相談」、「人権」等をテーマにした研修会を計画し、実施した。	研修内容の更なる充実を図る。
	研修成果の活用	研修における成果を、教育力の向上や日常の教育活動に生かす。	A		進路指導や人権教育などの研修成果を、日常の教育活動にフィードバックし、特に生徒への声かけに直接生かすことができた。	進路指導や人権教育の研修内容のさらなる充実を図る。
	授業実践力の向上	互見授業を含む授業研究により教員の教育力や指導力を向上させる。（複数回実施）	A		公開授業、互見授業はできなかった。しかし、休校中にICT機器の使い方を学んだことで、教員のデジタル教育力が上がり、指導力の向上につながった。	ICT機器を用いた授業を増やしていく。
教科指導	学習指導計画の実質化	年間カリキュラム、教科シラバスを作成して、実行する。	A	A	年度当初に各学年・各コースの特性を生かしたカリキュラム、シラバスを作成し、計画通り授業を実施した。	6か年一貫教育の観点から発達段階に即した内容に整理する。
	ICT教育の促進	3年計画でICT機材の利用を推進して、利用頻度を高める。	A		プロジェクターの簡便な活用法を共有し、タブレット、プロジェクターを活用する教員数が増え、授業の効率が上がった。	ICT機器の整備が完了し、中1から高1までデジタルデバイスを導入するので、今後は、ICTを活用した授業革新とともに教員のICT活用指導力の向上を図り、併せて教員の負担軽減のため校務の効率化をより一層促進していく。
	アクティブ・ラーニングの促進	アクティブラーニング教育の研究と活用実践する。	A		ICT委員会で各教科別にアクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業改革を行い、また生徒が使用できるタブレットが増加したことで、生徒同士が共同して取り組む課題を与えやすくなり、発表の場が増加した。	中1から高1までデジタルデバイスを導入するので、アクティブ・ラーニング教育の充実に向けてさらなる整理と研究をすすめ、公開授業をする。
特別活動 道徳教育	特色教育の充実	6年間を見据えた特色教育を行う。	A	A	各学年を分散したり時差を設けるなど感染症対策をとって遠足に代わる校外活動や体育祭に代わるスポーツ大会を実施した。グローバルキャリア教育として、高校1年ではオンラインでエンパワーメントプログラム。中学3年ではハワイミリラニ校とオンライン交流、イングリッシュワークショップを行った。	グローバル教育と国際交流の連携を図る。
	部活動の活性化	生徒の活動状況を把握して、積極的に活動を進める。	A		陸上部は、全国大会出場を果たした。	高校に入っても継続するように指導する。
	人権・道徳教育の推進	年間計画を作成して、全体、ホームルーム、授業を進める。	A		人権教育推進委員会が中心となり計画立案した情報モラルや平和学習、LGBTQ等のテーマをもとに、人権・道徳教育を実施した。	今後も人権教育推進委員を中心に計画を立てる。
進路指導	情報の共有化	進路状況（内外）を把握するため、頻繁に会議を行う。	A	A	最新の入試動向、受験実績等の情報を、進路指導部が収集、分析し、その情報等を担任教員と共有するとともに、連携を強め指導にあたった。	学年会などに進路指導部長が細かく指示するなど組織的な運営を行う。
	進路指導の充実強化	教務部、進路指導部が中心に計画を立てて、実行する。（進路指導満足度70%以上）	A		年2回の学力推移調査を実施した他、弁護士、会計士による出張講義を実施した。	進路指導報告会、講演会を今後も実施していく。
教員評価	自己評価推進	教員の自己評価を推進して、日常の教育の改善を図る。	B	B	生徒対象の授業アンケートに加えて、全教員に自己評価アンケートを実施した。授業、校務分掌の他、学校行事、クラブ活動等の成果を自己分析し、その結果を次年度の教育活動に役立てるよう指示した。	授業を見直すための生徒対象アンケート、自分自身を見直す自己評価アンケートを今後も続ける。

評価項目		具体的目標・方策及び評価指標 ※（　）内は評価指標	自己評価結果		評価結果の分析 （評価の観点、理由）	今後の課題・改善方策
内部進学 教育連携	帝塚山大学との連携推進	帝塚山大学教授による特別講義を実施する。（1回実施）	C	B	新型コロナウイルス感染症予防のため理科部ロボット班と帝塚山大学現在生活学部子ども学科の学生が連携しての小学生対象のロボット教室は中止した。	理科部ロボット班と教育学部との連携を継続し、新型コロナ感染症感染対策を万全にすることでロボット教室を実施する。
	帝塚山小学校との連携推進・小中内部進学の充実	帝塚山中学校・高等学校教育を内部児童・保護者に伝え、内部進学を推進する。（内部進学率60%以上）	B		帝塚山小学校の6年生保護者対象内部推薦説明会、5年生保護者対象説明会、5年生児童対象見学会・体験授業に加え、4年生保護者対象説明会を実施した。帝塚山小学校からの内部進学者は在籍者78人のうち38人、48.7%となった。	制度化されて5年目の運用となるが、小学校からの内部推薦充実化に向け今後も検討していく。
	中高内部進学の充実	帝塚山高等学校の教育目標・方針等を保護者に十分説明し理解いただく。	A		帝塚山中学校からの内部進学者は在籍者309人のうち300人、97.1%で、例年より内部進学が増加した。	内部進学を今後も充実させていく。

評価は４段階【Ａ：十分である（よくできた）、Ｂ：ほぼ十分である（できた）、Ｃ：あまり十分でない（あまりできなかった）、Ｄ：改善を要する（できなかった）】

２．-②　自己評価（学校経営に関するもの）

評価項目		具体的目標・方策及び評価指標 ※（　）内は評価指標	自己評価結果		評価結果の分析 （評価の観点、理由）	今後の課題・改善方策
組織運営	組織運営目標及び方針の周知徹底	「知・情・意志・躯幹の力」の教育を周知徹底する。（複数回実施）	A	A	管理職等による運営委員会を年25回実施し、進路、教育課程、生徒指導等の連絡・報告を密にするなど組織運営の充実に注力した。また、年度当初に、「知・情・意志・躯幹の力」の教育の周知徹底を含め、学校運営・学年運営・教科運営の各計画をまとめた冊子を全教員に配付し、共通理解を図るとともに、合同職員会議において、目標及び方針の都度確認した。	水曜日の会議を今後も実施し、組織運営、方針の徹底を図る。
	教員の適正配置	年度の教育方針に基づき、校務分掌を踏まえた適正な配置を行う。	A		必要とする教員数を配置するとともに、教科間のバランス、男女比及び年齢構成比を考慮するなど、適正な教員配置を実施した。	教員がどの部署でも活躍できる体制にする。
	会議運営の充実	校長の諮問機関として、課題解決の会議として機能させる。	A		年度当初の計画に基づいた会議、必要に応じて開催した臨時の会議の他、法人本部の協力を得ながら、都度課題解決を図った。	教員間の連携を一層深める。
安全管理 保健管理	学校安全計画立案	学校安全計画を立て、実施する。	A	A	学年や各分掌と連携し、学校安全に務めた。	学校全体で、安全対策強化に取り組む。
	学校防災計画立案	学校防災計画を立て、防災訓練を実施する。（年3回実施）	A		感染症対策のため、1回のみ実施。 地震の映像を視聴し、地震発生時の行動を確認する。密集を防ぐため、グランドへの避難は省略した。避難経路の表示の明確化した。表示をわかりやすく、教室外からの避難経路も掲示した。	火災、地震を想定した避難訓練を今後も継続。
	危機管理体制強化	危機管理マニュアルの周知徹底のうえ、救急救命講習、消火器具取扱講習の実施を計画する。（年3回実施）	A		消火：7月実施 救命：10月、3月に実施。 9月の事象を受け、危機管理マニュアルを再検討し、2月に改定した。	救命講習、消火器具取り扱い講習は継続実施する。 対象を非常勤講師に拡大して計画する。 危機管理マニュアルを全教職員で共有し、再確認する機会を設ける。
	学校保健計画立案	学校保健計画を立て、実施する。	A		保健体育部・保健室が中心となり、学校全体で協力し9月に感染対策をしながら健康診断を実施できた。 保健学習講演会については、対面での講演ができず、オンライン講習会として実施した。	継続して感染症対策を強化しつつ、学校行事や活動を実施できるよう計画する。
募集活動	募集計画の立案・実行	年間を通して計画を立て募集活動を行う。	B	B	校外での入試説明会を年5回開催した。総参加数は904家庭で、コロナ禍で会場の密を避けるため、人数制限を行ったこともあり、昨年度より523家庭減った。	入試説明会、学校見学会を今後も充実する。
	広報活動の強化	各説明会及びホームページを通して、教育内容の説明を行う。（延べ志願者数対昨年度比10%アップ）	B		校内での入試説明会の他、ホームページの「校内ニュース・トピックス」により最新の教育活動を発信した。内部進学者を除く志願者数は1887人となり、昨年度より79人減少した。	ホームページの内容を適宜更新する。
	関係機関との連携強化	関係諸機関との連携を強化して、時代に即した募集活動を行う。	A		進学塾、予備校、進学情報会社等外部機関の協力を得ながら、募集活動の更なる充実強化を図った。	1年間を通して関係諸機関との情報交換を密にする。
学校評価	自己評価の実施	自己評価を実施し、公表する。（総合評価「A」確保）	A	A	保護者全体会を開くことができず、また各行事が中止している中、例年実施している中学2年生、3年生の保護者へのアンケートはコロナ禍で見送った。	中学2、3年生の保護者にアンケートをする。
	学校関係者評価の実施	学校関係者評価を実施し、公表する。（総合評価「A」確保）	A		学校関係者評価委員会からの意見に対し改善方策を示していることにより、同委員会から、本校の運営は良好との判断を得た。	学校関係者評価は今後も続ける。

評価項目		具体的目標・方策及び評価指標 ※（　）内は評価指標	自己評価 結果		評価結果の分析 （評価の観点、理由）	今後の課題・改善方策
学校運営	クラス数の確保	入試状況を見ながら適正クラスを確保する。（1学年9クラス編成）	A	B	入学者330名で9クラスとなった。	教育計画どおり9クラスにとどめる。
	物件費の節減	厳正な予算執行し、節減を行う。（印刷費10%削減）	C		ペーパーレスの奨励、平成29年度入試よりWEB出願導入により、毎年、募集要項、入学手続き書類関係書類の印刷経費の削減に努めたが、今年度は、入試説明会等で配布する手提げ紙袋の在庫がなくなり、製作したため昨年度よりも経費削減ができなかったが、保護者への案内にさくら連絡網（メール配信）を活用したことにより、担任業務の軽減が図れた。	保護者への連絡にとどまらず、職員間も一斉メールで情報交換をする。

評価は４段階【Ａ：十分である（よくできた）、Ｂ：ほぼ十分である（できた）、Ｃ：あまり十分でない（あまりできなかった）、Ｄ：改善を要する（できなかった）】

３．学校関係者評価

意　見	改 善 方 策
平成27年度に発足したICT委員会のおかげで帝塚山の生徒は学ぶ機会を失わずに学生生活を送ることが出来たと考えます。生徒が広域から通ってくる為ご苦労も多いかと存じますが引き続き宜しくお願い致します。	新型コロナウイルス感染症対応下での自宅学習支援は、学校において生徒の学習権を守るという点で求められるところが大きいところです。休校中は、全教員でオンライン授業に取り組める体制を研究し、取り組みに不慣れなこともあり、本当に走りながらの対応でしたが、なんとか時間割を作り、それをもとに課題や動画を配信して生徒一人一人が自宅で学ぶことができるところまできました。 コロナ禍で多くの行事を延期、中止となりましたが、コロナ感染症の対策を工夫することで形を変えてできることをしていく取り組みは、今後困難を乗り越えていくときの大きな指標となりました。 オンライン化が加速し、ICTに関しては教育現場で存在感を増しています。今後は、生徒一人一人にタブレット端末を持たせ、単に授業中に利用するだけでなく、それぞれの学習状況に応じて適切な学習教材やデジタルドリルを導入し、家庭学習とのリンクを図り、学力向上に努めます。さらに、学んだことを情報交換し合い、学びをより進化させるために、学び合いを主導するなど、主体的・対話的な学習の推進に力を入れてまいります。また、学校からの情報共有やアンケートなどを行います。 このように、タブレット端末は子どもたちが、ICTをフルに活用し、これからの社会生活を、より主体的に生きていくためのツールとして様々な機会で活用されることになります。
新型コロナウイルスの影響が続く1年間となった令和2年度でありましたが、多くの活動や運営に大変努力されました事、大変評価致します。特に、緊急事態宣言の影響により、多くの日数が休校になる事態の中、工夫を重ねる努力を評価致します。	
大変厳しい時期、改善取り組についてご努力を頂いています。今後も引続き、子供達が学習しやすい環境作りをお願いします。	
コロナ禍により、予定していた学習や行事、部活動が十分できなかったことはやむを得ないことと思います。その中で、今まで当たり前にできていたことが、当たり前でなくありがたいことなのだという認識を持つことができたのは、大きな収穫と考えます。また、行事についても、リスクがあるから中止でなく、次につなぐという姿勢は素晴らしいと思います。このような状況だからこそ、この中で何ができるかということを模索することが新しい日常になってくると思います。	
他の私学と比べ、相対的にICT機器等の導入が遅れているのでは？という声を多く耳にします。ICT環境設備が整い、今年度より一人一台のデバイスの配布により本格的な指導に入っていきますが、一斉教育の押し付けにならないよう、宝の持ち腐れにならないためにも、しっかり目的に向かって実現・活用して頂きたく思います。子供たちが、学びたくなる授業が行われること、そして何より子供たちと繋がることを期待しております。コロナ禍の中、困難な状況が続く中、学校生活を安全に過ごせるようご尽力下さり感謝しております。今度ともどうぞ宜しくお願い致します。	
小学校からの内部進学の親としては、小学校だけの勉強では、外部生との学力の差はかなりあると思う。（個別に塾に行っていれば別だが。）大学にあまり魅力を感じない方が多く、大学まで進学できる中学を受験する方が多い。オンラインでも授業がスムーズに進むようにしていってほしい。（9月から実施されていく予定のPCの授業に期待しております。）	帝塚山中学校の生活を知っていただける機会として、小学校5年生の児童には体験授業を行い、4、5、6年生の保護者には学校説明会を開いています。内部進学推薦制度の充実とともに、中学校の魅力をアピールできるよう工夫してまいりたいと思います。
上記の内容をすべて読ませていただき、把握いたしました。一番気になったのは、帝塚山小学校からの内部進学率78人→38人　50%以下というところです。小学校受験をして、6年間通学し、毎日目にしてきた中学校は魅力に欠けるのでしょうか。どうやらすごく難関だというイメージがあるみたいです。内部推薦がもう少し充実されたらいいのにと思いました。偏差値の高い帝塚山中学校ですが、楽しい行事がとても多いので、その動画等を小学部の保護者の方々に見ていただける機会があれば、と思いました。	